

2020年11月22日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「畑に隠された宝」 マタイ福音書13章44～46節

主任牧師 加藤 誠

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」(マタイによる福音書13章44節)。

「天の国は次のようにたとえられる」(マタイ13:44、45、47)。

主イエスは「天の国」(神の愛の支配)がどのようなものであるかをいろいろな「たとえ」で語られた(マタイでは11の「天の国のたとえ」が語られている)。

「教義」(教え)として「神の愛とはかくかくしかじか…」と説明されるよりも、「たとえ」のほうが印象的で心に残りやすい。そういう意味で主イエスは「たとえ話」の名手であった。

今日の「たとえ」に出てくる「畑に隠された宝を見つけた人」と「高価な真珠を見つけた商人」はよく似ている。「宝」あるいは「高価な真珠」を見つけた二人は、「これを手に入れられるなら全財産を売り払っても惜しくない!」という熱い思いに突き動かされて、断固たる行動を起こしていつている。

「たとえ」が面白いのは、聞き手がいろいろ想像をふくらませて読むことができる点だ。たとえば「二人にもし家族が居たら大騒動になったのでは?」と想像する。「その宝って、ほんとにそこまでの価値があるの?」とか「まさか、偽物の真珠をつかまされているわけじゃないよね?」とか。万が一、目論見が外れたなら家族みんなが路頭に迷うことになるからだ。あるいは「畑で見つけた宝をそのままポケットに入れることもできたのに、なぜこの人は宝を埋め戻して畑ごと購入したのだろう?」という疑問もよぎる。あとで『それは盗んだものだ』とケチをつけられないように、畑の中の宝を『正当な形で』自分のものにしたかったのだろう。それと同様に、私たちが「天の国の宝」をほんとうに自分のものにするためには、都合のよいところだけを「盗み食い」するのではなく、真剣に自分をそこに「賭けて」自分のものにしていかないとならないのではないだろうか。

そのように、この二つの「たとえ」に出てくる二人のことをいろいろと想い巡らすうちに、主イエスに出会った弟子たちの姿が浮かんできた。ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレや徴税人マタイ、そしてマグダラのマリアたち。彼/彼女たちは、主イエスという人格に「畑の中に隠された宝」を見、「高価な真珠」を見出だして、断固たる行動を起こしていったのだ。想像するに「こんな田舎育ちの、どこの馬の骨かわからない男に従って行って、いったい何の見返りがあるのだ?」と、猛反対した家族も少なからずいたに違いない。しかし、それでも彼/彼女たちは主イエスに「宝」と「高価な真珠」を見出だし、すべてを賭けて従って行ったのである。

十二弟子ではないが、徴税人の頭ザアカイもしかり。彼は主イエスとの出会いによって百八十度変えられた。地上の財産よりもはるかに大切な宝である主イエスの言葉を受けたからだ。使徒パウロもしかり。ユダヤ教社会で大切な学歴や社会的地位、人びとからの榮譽を得るために全力を注いできたパウロだったけれども、主イエスの十字架に救い主の姿を見たとき、それらは「塵芥(ちりあくた)」に等しいものになった。そして「福音のためならどんなことでもする。わたしもまた福音にあずかるために…」と語るほどに、主イエスに惚れ込んだのだった。

そのように主イエスに従った弟子たちのことを思い巡らすうちに、わたしの父親の姿が浮かんできた。昭和七年(1932年)生まれで、太平洋戦争時には天皇陛下に忠誠を誓う軍国少年として靖国神社に毎日のように参詣し戦争の勝利を疑わなかった父。しかし敗戦後、教科書をすべて墨で塗りつぶすことになり呆然自失となった時に出会ったのがイエス・キリストだった。国民に死ぬことを求める神ではなく、ご自身の命を犠牲にしてすべての人(善人だけでなく、罪人をも)を生かす神。「この神の愛こそ真実の愛であり、人生のすべてを通して追求する価値がある」と、父は他のすべてを後ろにおいてイエス・キリストを選び取ったのだった。牧師として熱い思いをもち、他人とは敢えて違う道を行く个性的な人であり、他人とよく衝突した父であったが、今、年老いて「神さま、あなたの愛をありがとうございます」と手を合わせて祈る姿を見ると、神さまはこの父の人生の上に見事に真実の愛をあらわしてくださり、天の国の支配、神の愛の支配を見せてくださったのだ…という思いが深くこみあげてくる。

「十字架でご自身をささげられた神こそほんものだ」と、そこに福音を見出した父は、そのあとの人生をキリスト一本で生きた。もし牧師になっていなかったら何か起業していたことだろう。しかしまったく後悔していない。人にとって最も価値あるものを真ん中に生きることができたと、ただただ感謝しかない。

私たちにとって何が幸せなのだろうか。ほんものの神の愛を受け取って、神の愛に生かされていくこと。私たちはその神の愛を受け取っても、それでも弱く小さく、間違いだらけの人生だけれども、一人ひとりに共なってくださっているインマヌエルの主が神の愛をあらわし続けてくださる。その憐れみを感謝して、神さまを賛美していくこと。そこにこそ、他のものをすべて後ろにおいても追い求めていく「天の国の宝」が隠されているのではないだろうか。

ローマカトリックのフランシスコ教皇は「畑の中に宝を見つけた人は、冒険的な人。新しいことに踏み出していく、創造的な生き方をする人です」と語っているが、私たち大井教会もまた、神さまからいただく日々の暮らしの中に「天の国の宝」であり「高価な真珠」である主イエスを発見していきながら、その主からいただく喜びと賛美を人々に紹介していく群れでありたいと思う。